BRITISH COUNCIL

Education UK
Innovative. Individual. Inspirational.

Making Connections

British Council Higher Education Inward Mission Report

11-14 November, 2013

The Inward Mission November 2013

ブリティッシュ･カウンシル主催

第 5 回英国大学視察訪問報告書

11 - 14 November 2013, UK

目次

1. はじめに Page 2
2. University of Exeter Page 4
3. Swansea University and Welsh Government Page 10
4. University of Bristol Page 17
5. King's College London Page 22
6. 巻末資料（第 5 回英国大学視察訪問参加者リスト） Page 26

© British Council 2014

はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2013 年 11 月 11 日から 14 日までの日程で、「第 5 回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、12 大学（国公立大学 8、私立大学 4）から、総勢 13 名にご参加頂きました。参加者はまず、ロンドンに集合し、エクセター大学にて学生支援の実践を視察。続いてスウォンジー大学では、国際化戦略および産学連携における取り組みについて理解を深めた後、ウェールズ政府より、同国における高等教育行政ならびに教育の国際化推進に関する説明を受けました。さらにブリストル大学では、国際交流・研究推進に関する業務内容の紹介および日英産学連携スキーム「RENKEI」の説明を受けました。最後に KCL では、海外留学推進活動および留学生のサポートに関する発表がありました。

また今回は、初めての試みとして、各訪問先機関において各参加者が、日本の高等教育・国際化戦略と各所属大学の紹介を行うプレゼンテーションを実施しました。英国大学のユニークな国際化の取り組みを学び、日本の大学にとっても具体的な示唆を得ることができた一方で、英国の高等教育関係者も日本の高等教育の動向と各大学の国際化に関する知識を深め、日英双方にとって実りの多い意見交換を行うことができました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおして得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりましたら幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル

【第 5 回英国大学視察訪問開催概要】

実施日時： 2013 年 11 月 11 日（月）－11 月 14 日（木）

日本側参加機関：（アルファベット順）

国際教養大学、中央大学、一橋大学、北海道大学、慶應義塾大学、神戸大学、京都工芸繊維大学、九州大学、明治大学、沖縄科学技術大学院大学、立命館アジア太平洋大学、東京工業大学 （計 12 大学）

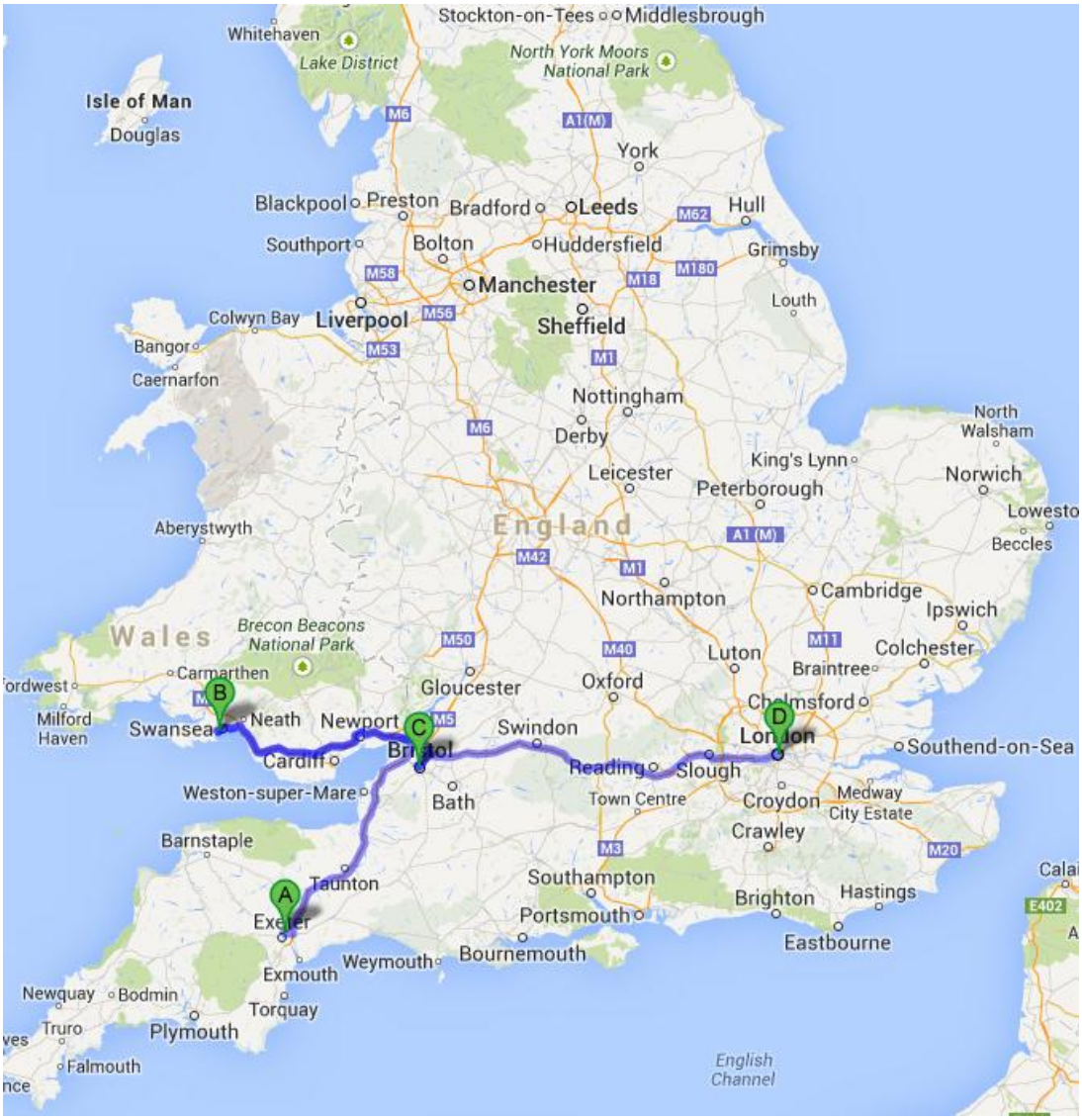
主催： ブリティッシュ・カウンシル

英国大学視察訪問　訪問大学一覧

訪問日		訪問先
11 月 11 日(月)	A	University of Exeter 訪問
11 月 12 日(火)	B	午前、Swansea University 訪問
		午後、ウェールズ政府によるセッションおよびネットワーキング・レセプション
11 月 13 日(水)	C	University of Bristol 訪問
11 月 14 日(木)	D	King’s College London 訪問。
11 月 15 日(金)		（オプショナル参加）夕刻、ブリティッシュ・カウンシル本部にて、”Experience Japan Exhibition” (慶應義塾大学主催、ブリティッシュ・カウンシル共催の日本留学フェア)参加校代表者、本視察訪問参加者、及び英国大学代表者を迎えてのネットワーキング・レセプション

© British Council 2014

第５回英国大学視察訪問　国内移動マップ



本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ･カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。なお報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ･カウンシルの公式見解ではございません。さらに４頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。予めご了承下さい。

© British Council 2014

1. 大学の概略

エクセター大学は、イングランド西部のデヴォン州エクセターにある公立大学である。設置認可を得てエクセター大学としてスタートしたのは 1955 年であるが、その起源は 19 世紀中頃にまで遡り、以来イングランド南西部における教育の要所として機能してきた。現在の学生数約 19,000 名、うち留学生は約 4,000 名が在籍し、その出身国は約 130 カ国にのぼる。学生は 100 を超える専攻から学びたい分野を選択することができる。

研究型大学を標榜しており、特に最先端科学、工学、数学、医学研究における成果が顕著である他、人文・社会科学分野についても高い評価を受けている。英国の大規模研究型大学 24 校で構成するラッセル・グループの一員でもあり、同大学が行う各研究分野のうち、半数が英国内トップ 10 以内の水準にある。また The Times and the Sunday Times Good University Guide、This year's guardian league table、The Complete University Guide といった英国内大学ランキングにおいて上位を占めるとともに（The Times and Sunday Times Good University Guide 2013 において英国 122 大学中 7 位、同 2014 では 121 大学中 8 位）、Times Higher Education's World University Rankings や QS World University Rankings といった世界的に認知されている指標においても、100 位台にランキングされる評価を得ている。

留学生の受け入れにも非常に積極的である。2005/2006 年度には、海外からの学部への留学生申請数は 4,763 名であったが、現在 2012/2013 年度は 318%増となった。在籍する留学生数についても、2006/2007 年度には総学生数の 10%に満たなかったが、2012/2013 年度には約 25%を占めるに至っている。留学生数の増加に伴う授業料収入が、エクセター大学の財政を一層強力にしているのも事実である。2006/2007 年度に比べ、2012/2013 年度には留学生からの授業料収入が 6 倍に増加している。

世界中で一大旋風を巻き起こした「ハリー・ポッター」シリーズの作者である J.K.ローリング氏は同大学の卒業生である。

2. 訪問スケジュール

交通事情によりエクセター大学への到着が遅れたことから、当初スケジュールのうち「大学の国際戦略」及び「海外提携大学と交換留学制度」のセッションがキャンセルとなり、以下のセッションのみが行われた。

1210 International Summer School 紹介

1310 Sir Steve Smith 学長主催昼食会

1430 Japanese Higher Education Sector and Introduction of the Three Institutions by Delegates
日本の高等教育システムについての説明と 3 大学についての紹介

1530 International Student Support Office 及び Student Information Desk 業務内容紹介及び質疑応答

1615 Alumni Networks 活動紹介及び質疑応答

© British Council 2014

3. 発表要旨

International Summer School 紹介

Mr Lyndon McKevitt, International Summer School Manager

エクセター大学のサマースクール（夏季講座）は、3 週間の短期プログラムで、Pathway と称する学習テーマを設定のうえ実施しており、全てのコースで単位を付与しているとのこと。2013 年度における Pathway は歴史、環境政策、国際経営、国際関係、法律、予防医学、文学、犯罪心理学である。

サマースクールと称してはいるが、授業はすべてエクセター大学プロパーの教員が担当し、エクセター大学ではサマースクールで 15 単位、ECTS（European Credit Transfer System ヨーロッパ単位互換制度）換算では 7.5 単位の単位を付与する。クラスは最大で 25 名。コースは講義に加え、Independent Study（自習）やグループワークにより構成されており、参加学生は期間中の授業パフォーマンス等の評価と、終了後に提出される小論文により評価される。

参加学生は Holland Hall という大学所有の宿泊施設（寮）に滞在する。居室はシングル仕様で、寮費に朝食と夕食 2 食分が含まれている。コース期間中、いくつかの交流プログラムが設定されており、参加学生は歓迎 BBQ、パブクイズ、カラオケ、ガラディナー、ストーンヘンジ等への週末バスツアーなどに参加できる。

応募に当たり、学生は TOEFL ibT90/IELTS6.5 のスコア、及び所属大学における学業成績 GPA3.0 を求められる。エクセター大学側も留学に必要な入国管理、英国での生活上必要な保険などについて留学生に直接電話やメールにて連絡する等のフォローを行っているが、それでも時折査証に関する問題が生じているとのこと。

Sir Steve Smith 学長主催昼食

Professor Sir Steve Smith（Vice-Chancellor and Chief Executive), Dr Claire Baines（Chief Operating Officer）, Dr Shaun Curtis and Mr Christopher Dean (International Officers）

昼食会時の Sir Steve Smith 学長によるウェルカムスピーチ概要は以下のとおり。

(1) エクセター大学について
エクセター大学への留学を志す学生を非常に魅力的に感じている。
Student Mobility は送り出す側、受け入れる側双方にとって重要な事項である。エクセター大学では、日本、中国、米国、香港、台湾、オーストラリア、シンガポールといった国々の大学との関係促進を重要視している。日本と英国は、昨今の学生が内向き志向である点、政府をあげて国際化に力を入れている点、大学における女性の活躍の場に力を入れている点が似ていると感じている。

(2) 英国高等教育事情について

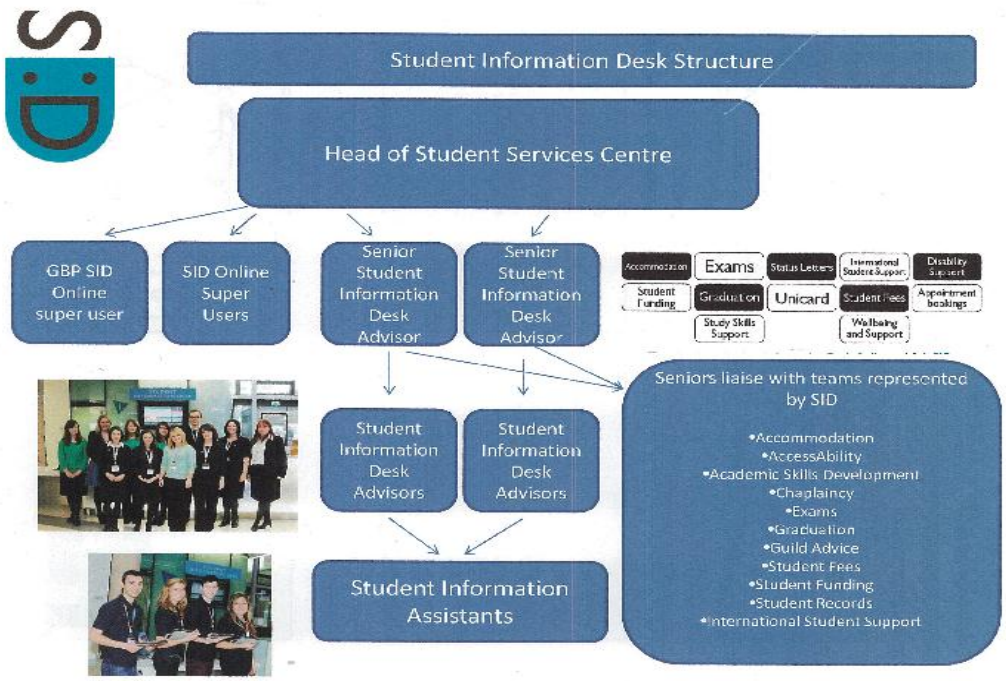
英国には 134 の大学がある。これは日本と比較すると少ないが、他国からの留学生受入数という点に置いては、米国について 2 番目に多く、その数は増加傾向にある。米国は全留学生の 20%、英国は同 12%を受け入れている。英国における高等教育のマーケットは、主に 1）学生数、及び 2）研究費によって創出されているのが現状である。

(3) 英国大学による研究活動の動向について
英国においては、大学における研究活動が大きな成功を収めている。費用対効果の点でみれば、投資額は世界で 25 位であるが、アウトプットについては第 2 位の成果を上げている。これは、研究費を少ない大学に集中して投資していることによって成されたものである。英国では、国が投資する研究費の 85%を、134 ある大学のうちの 25%で受けている状況にある。
日本については、政府が大学の研究活動をよく支援しており大学も一定程度の成果を上げているが、英国・米国と比較すると、投入した費用に対する効果という観点では必ずしも充分ではない、との印象を持っている

© British Council 2014

International Student Support Office 及び Student Information Desk 業務内容紹介及び質疑応答

Ms Amelia Mansfield, Senior International Student Adviser, International Student Support Office, and Ms Anna Russell, Student Services Centre Manager



エクセター大学では、学生からの様々な問合せに対するワンストップサービスを実現するため、Student Information Desk: SID を設置している。相談窓口を在学生が務めている点に特徴があり、英国内でも比較的新しい取り組みである。相談を受けた学生は、相談内容毎に各担当部署へ連絡する役割を担っている。導入に当たってはワンストップ化することに対する反対意見もあったが、結果的に過去の学生からの問い合わせ内容をデータベース化して共有できる等、効率化が図られている。例えば、第 1 学年からの質問等を 25%減らすという目標については、2013 年 9 月時点で 33%減、また在学生の FAQ 利用率向上（質問の重複を避ける）という目標については利用率 19%向上、という成果が上がっている。その他稼働実績は以下のとおり。

2012 年 5 月 2 日より現在 2013 年 11 月 11 日に至るまで、質問や相談に応じた学生数　191,297 名。 2012/2013 年度に限れば 149, 280 名。

在学生 18,537 名中、SID　On Line Service 登録者は 10,389 名。

学生からの質問形態について、メールでの問い合わせ 50.82%、直接面談対応 29.01%、電話 13.5%、ホームページやインターネット検索 5.9%。

質問内容について、アカデミックな内容について 23.26%、経済面について 20.27%、宿舎について 13.58%、エクセター大学及びエクセターの大学生について 9.8%、留学・パスポート等について 4.3%、健康相談等 10.83%、その他 5.78%。女子学生からの質問が多く 58.21%、男子学生は 41.79%。

Alumni Networks 活動紹介及び質疑応答

Ms Rachael Green, International Alumni and Development Officer, and Ms Katie Wade, Alumni Officer

英国政府の主導による Education UK ブランドのリ・ブランディングの取組により、英国留学、並びにその教育は、「社会」「文化」「キャリア」などの領域まで幅広くカバーし、広い範囲で個人にメリットをもたらすもの、つまり個人にとって非

常に魅力的かつ価値あるものであるとして、世界にその地位を確立した。この取組はエクセター大学にも多くの成果をもたらしている。

50 か国 18, 000 名を数えるに至った卒業留学生により運営されているエクセター大学の同窓会活動は、香港、トルコ、ギリシャ等で特に盛んである。大学は各国の同窓会組織と連携し、学生募集その他教育研究活動を実施している。

同窓会加入費は無料。同窓会組織からは、ボランティア活動や交流等のソーシャルイベント、British Council イベント、国外への留学・国外からの留学に関する留学前／出国前イベント、メンター支援、キャリア支援、その他日常的な質疑応答などについても支援協力を得ている。他方、同窓生が行うイベントには大学から経済的な支援を行っている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

- 学生自治組織「Student Guild」

エクセター大学には Student Guild（以下「ギルド」）という学生自治組織があり、新入学生の生活基盤支援から在学生のサークル活動、更には学生起業支援に至るまで様々な活動を行っている。更にギルドの代表者は、大学の経営・管理方針について学長にアドバイスを行う Senior Management Group の一員にも数えられており、学生の意見を直接に大学の意思決定機関に伝えることができる仕組みとなっている。

エクセター大学は、The National Student Survey による所属学生満足度ランキングでも常に上位にランクされている（2005 年から 2013 年の過去 9 年間、学生満足度トップ 10 以内の大学として評価を得ている）が、これはギルドが大学戦略方針決定に関与できることで学生の大学に対する帰属意識が高いことも理由のひとつであると推察される。

このような組織を運営するためには、学生側・大学側双方の高度な自治・両者の成熟した関係が前提となるであろうが、学生の社会性醸成という点、更に誤解を恐れずに言えば、大学側から見れば学生に対するサービスの効率化・深化という点においても、非常に有意義な制度であると思われる。

- 学生の協力を得て運営する「Student Information Desk Structure」と「Student Ambassador System」

エクセター大学の学生会館（Student Union）に入ると直ぐに、学生 5-6 名が Information Desk で働いている様子が目に入る。様々な質問を持った学生がまず訪れる「One Stop」「Information Desk」である。ここで働く学生たちが、各学生の質問に答え、また関連部署とアポイントを取り行き先を指示している。学生を待たせることなく次々に対応していくため学生の満足度も高いようであり、また窓口で応対する学生の側も誇りを持って働いているように見受けられた。

またエクセター大学では見られなかったが、訪問した英国の幾つかの大学で見られたのが、「Ambassador System」であった。キャンパスツアーを求める学外訪問者に、大学の Ambassador として雇用された学生がキャンパスの施設等を説明、案内する。これは既に日本の幾つかの大学でも行っていることであるが、学生の能力を上手く使う、また学生に社会との関わりを促進するものとして、勧めたい活動である。

© British Council 2014

- 海外にあるシーズの活用

  エクセター大学においては、サマースクールなど、短期間の留学生も校友に含め、海外校友会組織との連絡を密にし、各地において時に学長も出席するイベントを開催する等、そのメンテナンスに努めている。この結果、校友を介したリクルートメントや、現役学生の海外就業体験時のフォロー等に協力を得られているとのこと。日本の大学の多くは、国内の校友会組織の維持には注力するものの、元留学生に関しては大学への支援をいただく関係が築けていないケースが多いものと推察されるが、グローバル化進展のためには、日本の文化、更には校風に通じた元留学生を有効に活用することも必要であると思われる。

- 積極的且つ戦略的な留学生リクルートメント

  ターゲットとする地域や専攻分野に優先順位を設定する等、留学生リクルートメントについて非常に明確な戦略を有しており、エージェントや上述校友、更には教員も、この戦略に基づきリクルート活動を行っているとのこと。なお、エージェントについては出来高払いでの雇用との由、リクルートメントに費やす人員・経費共に、日本の大学の取組よりも随分と大きいものと見受けられた。これは同大学が「国際化」を図るうえで留学生が欠かせないピースであると認識していることの現れであると感じられた。

5. 報告者所感

エクセター大学は、Sir Steve Smith 学長の明確なビジョンの提示と大学の強みの明確化、そして強力なリーダーシップにより改革を断行した結果、近年の国内外からの高い評価を得るに至っているとの印象を受けた。これに比較すると、日本の大学にはよくも悪くも「総花的」「内向的」である、との感がある。これでは大学を選ぶ側＝受験生、特に日本も含めた国外大学への留学を考えている層にしてみれば違いを見出しにくいのではないだろうか。政府の差配によるか、それとも大学側の自主的なアクションによるか、いずれにしても留学生を獲得し「国際化」を進めるには、機能特化を進めなければ国際化に先んじている各国大学に伍することが難しいのではないか、と感じた。

英国あるいは世界でトップに数えられる大学には、強いブランドがある。ブランドを高めるためには、まず留学生を含め優秀な学生を発掘し入学させること（人材の発掘）、優秀な教員による質の高い教育を行うこと、大学の研究力を世界レベルに高めること、また絶え間ない研究から成果を出すこと、常に世界に目を向け世界の動きを察知すること、世界展開力を持って教育を行うこと、学生の主体性とリーダーシップを育成すること、学生がその大学に対する確固たるアイデンティティを持ち、その大学に誇りを持って生活できるよう、学生の力を様々な点で引き出す機会を用意すること等が挙げられるだろう。

エクセター大学は、ブランド力の非常に強い大学である。Sir Steve Smith 学長のリーダーシップのもと、学生数も 19,000 名と大きな大学であるが、迷うことなく大学力を維持し更に改善するために、一つの方向に向かっている姿は、非常に印象的であった。しかも今後は更に世界に目を向け、企業との共同研究や世界の他大学との共同研究を深め、継続して世界の高い評価を得ていくという点から、私たち日本の各大学も日本の中だけでの評価ではなく、国際的な評価を得る大学にならなければいけない、そのためには戦う舞台は世界でなければならないと強く感じた。

交通事情により到着が遅れ、一部プログラムがキャンセルとなった。特に、大学の国際戦略全般についてプレゼンテーションをしていただく機会がなくなってしまったことは非常に残念であった。

（報告担当：小林　和世、能登　博樹、柴田　徹、日笠　誠）

© British Council 2014

2013/11/12

1. 大学の概略

設立年: 1920 年

場所: スウォンジーは、ウェールズ州西部にある歴史的都市で人口 230,000 人からなるウェールズ第 2 の都市である。スウォンジー大学は、UK でも傑出した自然の美しさを誇る景勝地である Gower 半島の突端にあるスウォンジー湾を見渡す、とても美しい緑地公園に位置している。

学部・研究科:

スウォンジー大学では、各分野を合わせると約 500 の学部課程コースが開講されており、修士課程には 150 のコースがあり、MBA コース、文学修士コース、理学修士コース、法学修士コース、MBL コース、MRes コース、MPhil コース、博士号コースが展開されている。

学生数: 全学生数 15,921 人、留学生数: 2,600 人

教職員数: 2,510 人

国際化関係(海外提携、海外拠点等):

EU; フランス、ドイツ、スウェーデン

北米; カナダ、USA

南米; コロンビア、ブラジル

アフリカ; ガンビア、ナイジェリア、ザンビア

西アジア; インド

東アジア; 中国

オセアニア; オーストラリア

他、全世界の大学、研究機関との連携を展開している。

最近の話題、アピールポイントなど:

研究の質;

36 位 研究の質 (UK)

2 位 土木工学分野での研究の質 (UK)

5 位 建設分野分野での研究の質 (UK)

21 位 コンピューター学分野での研究の質 (UK)

200 位 土木工学・機械工学・地理学分野での研究の質 (世界)

産学連携;

産学連携により建設が進む「Bay Campus」が、2015 年 9 月に開校する。「Bay Campus」では、企業と大学がコラボレートすることにより、施設の共同利用、企業の最新研究機器の大学での使用、応用研究、イノベーションおよび雇用の確保が見込まれる。

© British Council 2014

2. 訪問スケジュール

【Swansea University】

0930 歓迎の辞

Professor Iwan Davies, Pro Vice Chancellor (Internationalisation and External Affairs)

0945 発表：国際化戦略の展開と実施／International Development Office の紹介

The development and implementation of Swansea University's internationalisation strategy / Introduction to the International Development Office

Mrs Sian Impey, Head of Internationalisation

1030 発表：留学生サポート

Supporting our international students

Mr Neil Gaskin, Head, International Students' Advisory Service

1115 発表：学生就職力の強化

Enhancing student employability

Mrs Judith James, Project Manager, Swansea Employability Academy

1145 発表：キャンパス開発プロジェクト

Swansea University's campus development project

Ms Ali Parker

1215 研修グループ（日本側）による日本の高等教育における国際化および参加者大学の紹介

Visitors' presentation

Visiting delegation

1300 Networking Lunch

【ウェールズ政府】

1600 Reception and Networking in Copthorne Hotel

Academic Representatives and students from Cardiff University and the University of South Wales

1615 発表：ウェールズ政府における高等教育およびに教育の国際化に関する取組み

Presentation Further and Higher Education in Welsh Government, Q&A

Stuart Lyden, Geographical Lead Officer for Japan in Welsh Government , Neil Surman

International side of Education in Welsh Government, Q&A

Brian Herbert

1720 Refreshments, afternoon tea and networking

3. 発表要旨

【Swansea University】

歓迎の辞

Professor Iwan Davies, Pro Vice Chancellor (Internationalisation and External Affairs)

スウォンジー大学は 1920 年に設立以来、研究重点型大学として Innovation を旨としてきた。Innovation のためには Inspiration が重要だが、それには学生に海外経験の機会を与えることが重要だと考えている。グローバル企業との連携や国際的視野に立つ教育を重視している。

国際化戦略の展開と実施／International Development Office の紹介

The development and implementation of Swansea University's internationalisation strategy

Introduction to the International Development Office

Mrs Sian Impey, Head of Internationalisation

国際化戦略の展開と実施

スウォンジー大学では、世界大学ランキングでトップ 200 位に入ることを含む、2012-2017 年までの国際化に関する行動計画（mission statement）を発表した。

この狙いはスウォンジー大学の総合的な国際化、つまり教育、研究、学生サービス等、全ての面にわたる国際化であり、あらゆる活動を通じて計画を達成する予定である。

大学の国際化戦略を学内に浸透させるため、上級管理職レベルへの支援を行い、国際化担当の副学長が機会を捉えて積極的に発言を行ったり、広報したりするなどしている。また、国際化戦略マネジメントグループという枠組みで、各分野から教員を集めたグループを作り国際化の戦略を検討している。学内が統一して目標を達成していけるよう、各コレッジが国際化を自らの目標と感じるように促すことが重要である。

具体的な4つの目標:

- 国際パートナーシップの拡大

  100 校を超える国際パートナーシップについては、個々の大学との交流度により3つのレベルを設定しており、ピラミッドモデルとして捉えられる。パートナー大学の選定については、トップダウンで決まる場合と、ボトムアップで決まる場合がある。

  1) ごく少数の重点大学

     重層的にあらゆる分野で提携する大学

  2) 通常の交流を行う大学

     大学教育のレベルで交流する、通常型の大学

  3) 戦略的に提携する多数の大学

     学生を海外へ送るための戦略の一環として、その受入れ先として提携する大学

- 学生に国際経験を提供する機会を拡大

  ウェールズ内に留まりがちの学生に競争力をつけ、国際社会での対応能力をつけるため、様々なプログラムを用意している。半年～1 年の海外留学、サマースクール、勉強以外では、インターンシップ、ボランティア活動などの機会を提供している。

  これらを推進するため、単位互換等を容易に行えるよう、カリキュラムに柔軟性を持たせるべく改革を行った。

- 留学生の受け入れ拡大

留学生の受け入れを拡大しているが、特に留学生が多い出身国は、中国、香港、中東、ナイジェリア、インド、ノルウェーなどである。英国政府の取組みによりブラジルからの受け入れも積極的に行ってきた。また、留学生をサポートするため、成績優秀者への奨学金の提供や、英語学習センターの整備などを行っている。

- グローバル企業との連携

  多国籍企業との連携を強化している。学生のインターンシップを受け入れてくれるパートナー企業を見つけるのは難しいが、ブリティッシュ・カウンシルを通じて英語教員のポジションを獲得するケースや、海外にいる卒業生のコネクションを使う例もある。

International Development Office の紹介

International Development Office は約 20 名、リクルート担当、学生派遣担当、事務系、協定校担当などのグループがある。リクルートは、ヨーロッパ、北・南米、アジアなど地域ごとに担当している。

留学生サポート

Supporting our international students

Mr Neil Gaskin, Head, International Students' Advisory Service

スウォンジー大学での留学生サポートは、学生の便宜を図るためワンストップショップ方式としている。

学生サービスは、統一された、プロフェッショナルなものでなくてはならず、また学生指向のものとし、学生が学業に専念できるような環境づくりを目的としている。

学生カウンセリングサービスも行っているが、男性女性両方のスタッフを置き、気軽に立ち寄れるサービスを目指している。カウンセリングのプロによる相談ができ、対面相談だけでなく、オンラインでの相談も可能である。このほかにワークショップやグループセッションを通じた啓蒙活動も随時行っている。

障がい者支援オフィスでは、学習障害も対象としている。IT 訓練や問題解決プログラムなどを行っている。

また、留学生の場合は特にお金にまつわる問題も多く発生するため Money Advice and Support Office を設けて、資金繰りのプランニングをサポートしたり、奨学金や補助金の獲得を支援したりしている。もちろん、これらはすべて守秘義務により相談者の秘密が守られている。

その他の留学生支援としては、次のようなサービスを行っている。

ビザサポート、警察登録の支援、雇用規則関連の支援、海外旅行時のビザサポート、ヘルスケア、留学生の家族への対応、寮の問題、アカデミックライティング

このほかに、学生の互助組織として、Students' Union（学生自治会）がある。学生はここに所属することで社会人としても活動している。Students' Union も独自に学生サービスを提供している。1 年間休学して Students' Union で働く学生もいる。

学生就職力の強化

Enhancing student employability

Mrs Judith James, Project Manager, Swansea Employability Academy

スウォンジー大学の就職・進学率は 93%で、英国のなかでも高い率を誇っているが、学生に積極的に社会経験を積ませたり、学生の起業精神を養ったりしていることが寄与している。また、地元での就業経験についてはポイントシステムによる表彰制度もある。

その中核となる Swansea Employability Academy では、次のような取り組みを行っている。

- 社会で必要とするスキルや経験を、ワークショップなどを通じて積ませる

  Interview skill や CV 作成のためのワークショップ等を開催している。

  2013 年度から全課程、全専攻を対象とした 1 週間の無給の work placement（インターンシップ）である Week of Work (WoW) を設置した。また、夏季で集中してインターンシップを行うプログラム Swansea Paid Internship Network (SPIN)も設けている。

  WoW においては、大学が学生の旅費等をカバーしている。

  SPIN では、海外におけるインターンシップに参加することも可能となっている。

- 起業家精神を開発する

  グローバル起業 Week を設け、あるいは懸賞を作って学生のアイデアを募集するなどの活動により、起業家精神を養っている。

- キャリア準備

  就職や卒業後のキャリアについてガイダンスやアドバイスを通じ、学業と就職が結びつくようにしている。

- 「やればできる」という態度を育てる

  国際的視野を持たせ、流動性を持たせるため、学生の海外経験を促進する。

キャンパス開発プロジェクト

Swansea University's campus development project

Ms Ali Parker

スウォンジー大学の発展のためには既存の設備では限界があり、規模拡大の必要性がある。新しいキャンパス（Bay Campus）を開設してサイズの拡大を図ることになった。Bay Campus は 65 エーカーの海岸沿いの場所にあり、2015 年のオープンに向けて現在整備を進めている。工学研究科、及び経営学部が新キャンパスに移転する。

新キャンパスは、Knowledge Economy project として産学連携を前面に出したキャンパスで、企業がキャンパス内で活動する co-location モデルを採り入れる。単に研究協力するだけでなく、空間も共有することで、より優れた研究成果を生み出す原動力となり、雇用機会の拡大になる。

スウォンジー大学は研究活動の推進のため、タタグループやロールスロイス、BP などと提携しているが、こうした企業との連携においては、EU からもモデル校として取り上げられており、スウォンジー大学の強み、セールスポイントとなっている。新キャンパスの敷地も、企業からの提供である。

新キャンパス開設には莫大な経費がかかるが、教育・研究以外の意義としては、地域振興のメリットもある。

【Welsh Government】

ウェールズ政府における高等教育およびに教育の国際化に関する取組み

Presentation Further and Higher Education in Welsh Government, Q&A

Stuart Lyden, Geographical Lead Officer for Japan in Welsh Government, Neil Surman

International side of Education in Welsh Government, Q&A

1999 年の地方分権化でウェールズ政府が成立して以降、ウェールズ政府はウェールズの教育行政を運営している。ウェールズは「Learning Country」を標榜しており、教育に重点を置いている。

各高等教育機関に資金を分配する高等教育財政委員会（Funding Council）としては、特に、研究、学生の多様化、学生の就職力に重点を置いている。

2006 年以降、ウェールズの高等教育における構造改革を行い、昨年は、大学統廃合によりサウスウェールズ大学を設立した。高等教育においては、持続可能で、競争力があることが重要である。

学生に対する政策として、ウェールズ出身の学生が、英国内のどの国・地方の大学へ進学してもその授業料の一部を補助するなど、潜在能力のある学生が高等教育に確実にアクセスできるように努力している。

大学への資金補助方針としては、ウェールズの大学の競争力が高まるよう、個別の研究プロジェクトにではなく研究の基礎になるインフラ整備に対して補助している。

いずれにせよ、長期的視野において、ウェールズの雇用拡大につながるなど、単に教育・研究の振興にとどまらず、ウェールズそのものの振興につながるよう政策を立案している。また、国際社会においてウェールズの存在感を際立たせ注目されるよう、ウェールズのアイデンティティの確立や、信頼の確立につながるような政策を立てている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

- 海外大学のパートナー校を３つのレベルに分類しそれぞれ戦略を変えて交流を進めていく取り組みが参考になると思われる。最近では留学生受け入れだけでなく、自大学学生の留学を促進するためにも多くの海外大学との連携が必要になってくるが、連携先が多くなるほど、個々の大学の特徴を生かせないまま平均化し、数の管理に追われる傾向がある。スウォンジー大学のように提携先を分類し、重点大学と位置づけた大学とは、学生の交換留学交流だけなく、教員の研究交流や職員交換なども行うなどすれば、海外拠点としての足掛かりになると考えられる。
- スウォンジー大学は、研究に重点を置き、特に科学の応用・実践を重視していく大学である。2015 年９月に開校する、「Bay Campus」は、産学連携をベースとし、その建設用地から、建設費に至るまで、多くの費用を関係企業からの出資により賄っている。開校後は、エリア内の LABO やファクトリーに、関係企業が入居し、大学との連携による R&``D が、ホリスティックかつ効率的に展開していくものと思われる。日本の大学でも、企業からの寄附による研究棟の建設はあるが、キャンパス自体が、産学連携の場となる試みは特筆すべきものであり、今後、「Bay Campus」から発信されるだろう多くのアウトプットがイノベーションに展開していく過程を注視して行きたい。
- 国際化戦略について、特に目新しい取り組み等があるわけではないが、個々の取り組みの関係性、規模、学内における全学的な戦略の浸透等、目標を着実に達成するための意識・工夫がみられる。総合大学等規模の大きい大学の場合、基本的なことではあるが、全学が同じ目的意識を持ち、取り組みを行っていくことは特に重要と思われる。

5. 報告者所感

スウォンジー大学での取り組みは、どれも新奇なものではなかったが、一つ一つが着実に、また規模を伴って行われていることで大きな成果を上げていると思われた。また、大学が単に教育・研究のコアであるだけなく、経済面でも地域社会の中核を担っている責任感が伝わってきた。企業との連携の規模やレベルに驚かされたが、研究資金の獲得だけでなく、地域振興という側面もあると思われる。そうした堅い「地盤」をもとに、常に国際社会を意識しながら目標を定めている点に共感するとともに、こうした姿勢を自大学での取り組みに反映させていきたいと思った。

ウェールズ州は、UK のなかでも、特に風光明媚な州の一つとして有名であり、そこに在る、スウォンジー大学は美しい自然に恵まれた大学だった。また、スウォンジー大学の教育、研究活動は、ウェールズ州地域の発展の拠点としての役割を担うことに加え、産学連携をベースとした、ウェールズから世界を見据えたアグレッシブな企画・展開力を有していると考えられた。このことは、日本の地域の大学の今後の展開においても大きな参考となると思われる。

© British Council 2014

学生就職力の強化において、単なるセミナーやワークショップだけではなく、Week of Work (WoW)や Swansea Paid Internship Network (SPIN)といった、学生に実際に就業経験をさせるプログラムを全課程、全専攻を対象に企画・運営することは、受け入れ先の確保や経費の面、また、海外でのインターンシップであれば安全の面からも労力を要するのではないかと思われる。研究重点大学ということで、既に相当の規模での企業との連携が行われているようだが、それを基盤とした学生の教育及び国際化が行われていると感じた。

（報告担当：片野　靖子、鈴木　民香、川向　誠）

1. 大学の概略

ブリストル大学は、1909 年に設立されたイングランドのブリストル市にある、6 学部から成る国立大学。過去に 11 名のノーベル賞受賞者を輩出し、ラッセル・グループ(英国の大規模研究型大学 24 校で構成するグループ) 及び欧州大学連盟のコインブラ・グループの加盟校。また英国で最初に女子に門戸を開き、ウィンストン・チャーチルが 30 年以上学長を務めた大学でもある。生徒数は学部 12,920 名、大学院 4,055 名(2012 年度)。留学生数は約 3,500 名で、学生数に占める割合は約 20%。THE ランキング 79 位 (2013-2014) 、QS ランキング 30 位 (2013) 。

2. 訪問スケジュール

歓迎の辞、国際部について

Welcome from Claire Alex-Berg, Head of International Office.

慶應義塾大学、京都工芸繊維大学、北海道大学による日本の高等教育と国際化戦略、各大学紹介

Presentation from Japanese Delegates.

学生の留学について

Presentation and Discussion of Study Abroad academic student exchanges with Beverley Orr-Ewing, Senior Study & Work Abroad Officer.

Research & Enterprise Development チームの紹介

Presentation and Discussion on University of Bristol Research & Enterprise Development internationalisation strategy Dr Lorna Colquhoun, Head of Research Development.

研究教育学術ネットワークのプログラムの紹介

Presentation and Discussion of Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives (RENKEI) academic exchange programme, Dr Alison Leggett, Head of Academic Staff Development, University of Bristol Human Resources.

キャンパスツアー

Campus tour with Student Ambassador Mr Tim Roberts.

3. 発表要旨

国際部について

国際部の運営体制について

© British Council 2014

国際部は留学生に関する業務全体を統括する。その中には、留学生のニーズを満たすためのサポートサービスを充実させることも含まれる。また、研究者を含む国際交流の機会を探し、基金を強化することによって留学生リクルートや多様性などを強化する。

- 4 つのチーム体制。①International Student Recruitment Team、②Study and Work Abroad Team、③International Advice and Support Team、④International Office Assistant and Interns
- International Student Recruitment Team は 10 名のスタッフがいる。留学エージェントとの調整や、出願手続きの支援などを行う。
- Study and Work Abroad Team は 5 名のスタッフがいる。留学生の受入れ、送出し双方の業務、海外の提携先との交渉、留学する学生の健康や安全を確保するための手続き、科目等履修生の宿泊施設の確保や精神的なケアの実施、授業料を支払う留学生のリクルート、プログラムの一環で海外で働く学生の支援など多岐にわたる業務を行う。
- International Advice and Support Team は 5 名のスタッフがいる。ビザに関する支援を提供し、家族を帯同する留学生に対して、住まいや学校探しのような問題についてウェブでアドバイスを提供する。その他にもウェルカムイベントを企画するなど、留学生の身の回りで生じる問題についてアドバイス、及びサポートを提供する。
- International Office Assistant and Interns は 2-3 名のスタッフがいる。大学訪問者への対応や、マーケティング用のプロジェクト企画、繁忙期のサポート、ビザ支援補助のような専門的な業務の代行、窓口業務など多様な業務を行う。

慶應義塾大学、京都工芸繊維大学、北海道大学による日本の高等教育と国際化戦略、各大学紹介

- **日本の高等教育について**
- **日本の国際化戦略について**

学生の留学について

学生が海外に出ることを国際化への鍵として、推奨している。そのため、SWAP(Study and Work Abroad Placements)という留学生の出入りを管理する部署を配置している。

Study and Work Abroad のチーム体制について

- 5 名のスタッフがいる。
- 各関連学部にはコーディネーターを配置している。
- 協定について
- どのような協定をどのようなパートナーと締結するかは、各種留学プログラムの成功への鍵である。
- 留学生の交換だけではなく、長期的な結びつきを構築することも不可欠である。
- 世界中の同等ランクの機関との協定を目標とする。
- しばしば教員サイドの満足度と学生の満足度を妥協させる必要がある。
- 協定を締結するにあたり、スタッフがすでに持つコンタクト(研究者のネットワークなど)を活用することがある。
- 学生送出し先となる協定校が不足しており、協定校数の増加を計画している。

留学に係る統計データ

- エラスムス計画による同大学への転入者は 257 人、他大学への転出者が 421 名である。
- (エラスムス・ムンドス計画はヨーロッパ外にも開かれ、世界中の大学の修士課程の学生の交流促進と、国境を超えての学習の支援を目的とする。)

© British Council 2014

- 短期留学プログラムによる海外からの留学生は 123 名、海外への留学生は 112 名である。

海外への学生送出しについて

- 海外への留学生に対応した 4 年間の独自プログラムを組んでおり、フランス語にも対応している。
- 留学フェアの開催
- 大学の選定については、その国の気候・食事などを考慮した上で、事前に 3 回、学生本人を短期間で訪問させるなどし、候補者の各国への配置については慎重に検討を行っている。また渡航後に、学生の経過観察も行っている。

海外からの留学生受入れについて

- オリエンテーションの実施
- 留学生が入学する 2 週間前に Welcome Lounge という様々な活動を含むオリエンテーションを行っている。
- 留学生に対する定期的な接触
- 留学生は慣れない環境で非常に敏感になっているので、身の回りの全てのことに目配りをし、何事にも迅速に対応するように心がけている。
- 留学生同窓会ネットワークの構築
- 海外へ帰っていった留学生は、大学の魅力を国際的にアピールするために大きな力となってくれるため、同窓生のネットワークの確保及び PR を常に行う。データベースの管理は CMS で行っており、卒業生への呼びかけ等のアクセスはフェイスブックを中心に実施している。

Research and Enterprise Development チームの紹介

チームについて

- 学内外のアカデミック、研究者、学生、起業家コミュニティと連携し、国際的な研究や資金のサポートを行う。

Worldwide University Network について

- WUN は 2002 年に設立された世界的な研究大学のパートナーシップである。現在は 18 大学が加盟。世界的な研究を促進することで、国際的な高等教育ネットワークになることを目標に掲げている。

研究教育の学術ネットワークのプログラムの紹介

RENKEI について

- Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives の略称。日英産学連携スキームで、パブリック・エンゲージメント、技術・知識移転、人材育成などの分野で高等教育と産業界との連携強化を目指し、2012 年 3 月に日英の大学が設立した新たなパートナーシップ。日本からは京都大学、九州大学、名古屋大学、立命館大学、東北大学、英国からはブリストル大学、リーズ大学、リバプール大学、ニューキャッスル大学、サウサンプトン大学、UCL（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン）が参加。
- 博士人材・若手研究者育成プログラムの一環として、「The 2013 RENKEI Researcher Development School in Bristol and Kyoto」を開催。その目的は、①異なる分野・文化の研究者との協働を導くスキルを有する将来の研究リーダーの養成②明白な成果を残せるよう、参加者同士の活発な協働を促進③日本と英国の研究者間での持続的なネットワークを構築するためである。
- 今回発表のあった RENKEI School は 7 月に 2 週間ブリストルで、12 月に 2 週間京都で実施された。テーマは持続可能な都市について。
- 参加者の選定にあたっては、研究の発展性・英国/日本の理解度・テーマに対する興味等を考慮し、性別・研究分野・経験等の広がりをもたせた上で 19 もの分野から人材が集まった。

© British Council 2014

- 7月に2週間ブリストルで行われたスクールでは、異文化交流や研究者としての能力養成などが図られた。内容は下記の通り。
  1日目は互いを知るための「探索」。2-3日目は「発見」とし、コミュニケーションを図るための自信を築き、他文化からの人に対する理解と相互作用を行う実践的な能力を開発するために演劇を行う。4日目は、異文化・異分野間の人と効果的な意思疎通を図り、プレゼンを行う。5日目はアイデアを生み出すための発想・起業家としての精神を高める活動を行う。6日目はNational Composite Centreにて産業界の人々と議論を行った。7日目はそれぞれのテーマに関するチームを作りアイデアを展開させる「World Cafe」を開催。8日目はMBTIと呼ばれる手法を用いて他のメンバーとの情報伝達等に対する個人的な特性の差異について理解を深める。9日目は各チームのコンセプトを明確にし、商業化の可能性などを踏まえながら次のステージに向けての調整。10日目に4チームが各々のプレゼン。
- 研究者個々人にとって、スキルの向上や異文化交流、研究や経歴への新たな視点、国際的な研究のネットワークや友好関係を構築できるというメリットがある。機関にとっても、研究者の能力向上や研究リンクが構築されるというメリットがある。

キャンパスツアー

Student Ambassadorによるキャンパスツアーが実施された。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

他大学と協定を締結する際は、闇雲に結ぶのではなく、目的を持って相手校を選ぶべきであるという姿勢は日本の大学も参考にする方がよいと思った。協定数の多い大学こそ国際化が進んでいる、という印象を持ちやすいが、量よりも質を重視しての締結が重要であるということが伺えた。学長からのトップダウンにより海外校との提携が進められているが、これは国際業務の重要性について自覚がされているためであり、日本の大学との差を認識することとなった。海外校との提携についても、常に自校の分析を行うとともに、相手校のランキングのみならず、学術的な類似性、学生の満足度など多方面から分析を行う戦略的な姿勢に感銘を受けた。

学生と教職員が共同しながら大学運営を行うことである。キャンパス案内は学生によって行われた。キャンパス事情や学生事情を最も熟知している学生を活用するよい事例であると感じた。学生自身も社会に出ていく上での自信を身につけることができる。近年、英国の大学では国内の学生に対する授業料が値上げされたため、学生の発言権が高い。お互いの持っている情報を有効に活用しながらの大学運営が進んでいる。

ブランディングが進んでいると感じた。名刺やプレゼンテーション用テンプレートの統一から、大学の建物やファイルまで様々なところにシンボルマークを使用している。自分の大学のプレゼンス向上にブランディングの統一は欠かせない。日本の大学のブランディングは海外の大学と比較すると遅れている。またこれらのグッズについては、大学内の独自店舗だけではなく、オンラインショッピングでも販売がされており、ブランディングのみならず数少ない大学の自己収入の確保にもつなげていた。

4月～9月、10月～3月の半期に分けて年2回のgap yearで学生の受け入れを行っている。日本の現行の制度では、入学時期の春秋併存は一般的ではないが、他国の大学事情に合わせて幅広い学生を獲得するためには重要な制度であると感じる。

まだ英語に不慣れな留学生のために入学の2週間前からWelcome Loungeという様々な活動を行っている。本学でも同様なオリエンテーリングは開催しているが、ブリストル大学では、映画・山歩き・お茶会・市街観光・ボランティアフェアなど留学生を惹きつける多様な内容で自国の文化・風俗・言語に慣れ親しめるような取組を行っている。

留学生サポートにおける学生の活用： ブリストル大学に限らず、今回訪問した英国の大学では、留学生サポートにおいて学生を積極的に活用し、効率よく運営していると感じた。ビザ手続き補助、宿舎あっせん補助などはスタッフが行うことが多いが、空港でのピックアップ、オリエンテーションでの説明、キャンパスツアー、各種学生交流イベント企画・運営などは学生主体で行っていることが多い。オリエンテーションやイベント企画・運営は、学生スタッフが主体となって行うことで、より留学生のニーズに応えることが出来る上、学生のリーダーシップ、異文化理解の醸成にも貢献している。

また、本研修訪問時にも2つの大学で学生にキャンパス･ツアーをしてもらったが、各建物・施設の案内はもちろんのこと、参加者からの質問にもしっかりと受け答えしており、きちんとトレーニングされている印象であった。学生は賃金報酬も得られる上に、Employability にも大きくいい影響があるため、非常に人気が高いアルバイトとなっているとのこと。

5. 報告者所感

国際部の体制がしっかりしていると感じた。役割ごとにチームを作り、仕事内容に精通している印象を受けた。

各部署の職員の専門性の高さに驚いた。プレゼンテーションを聞いていても、質問に対して、明確に答えられていた。海外の大学職員の大半は、スペシャリストである。1 つの部署でずっと働くので、専門性が深い。日本の大学職員は 2～3 年でローテーションするので、様々な部署で大学全体を理解できるというメリットがある。どちらが良いというわけではないが、部署によっては高度な専門性が必要なところもあるので、適材適所に実施してもよいのではと感じた。

各大学と競争するには、自身の大学の強みは何なのかを理解した上でなければ勝てない。そこで自分の大学をよく分析する必要があると感じた。

自校の学生を海外に送り出すことについての積極的な姿勢を学ぶこととなった。このことは学生を海外へ送り出すことを自国の国際化を進める上での大学の重要な責務として捉えていることの現れである。学生を送り出す際には、滞在先の気候・食事などを考慮し、渡航後にも経過観察を行うなど、手厚いケアを行っていることについても驚かされた。

英国は古くから移民政策が取り入れられるなど自国の国際化に熱心である。そのため英語を母国語としない学生に対する取り組みも多岐にわたっており、学生・教職員の英語力の強化を求められている本学(を含む日本の大学)にとっては大きな収穫であった。

海外への学生送り出しについて：　英国（大学）が Prime Minister’s Initiative 等で留学生の受入れに力を入れていることは知っていたが、どこの大学でも学生の送り出しのほうにより力を入れている印象を受け、意外であった。背景として、英国の留学生受入数は米国に次ぐ世界第 2 位にも関わらず、英国の学生派遣数は世界第 25 位。また、英国の産業界からは、「国際的な考え方を持ち、多様な文化があることを認識し、さまざまな状況で活動でき、かつコミュニケートできる学生」を求められている一方で、企業アンケートによると、企業は英国人学生の外国語スキル、異文化理解への認識が不足していると感じている。また、各大学、送り出しの受け皿となる適切なパートナー探しを積極的に行っており、日本の大学にとっても大きなチャンスである。しかし、多くの学生はアメリカを希望、次いでフランス、ドイツ、オーストラリア、アイルランドとエラスムスまたは英語圏内を希望しているのが現状。アジアに限ってみても中国、インドに目が向いているのが現状。

（報告担当：文字　真弓、清水　祐介、古賀　朝也）

1. 大学の概略

キングズ・カレッジ・ロンドン（King's College London, KCL）は、ロンドン大学を構成するカレッジのひとつであり、ジョージ 4 世及び初代ウェリントン公爵アーサー・ウェズリーによって 1829 年に設立された、イングランドでは 4 番目に古い名門大学である。KCL はラッセル・グループのメンバーで、9 つの学部と 5 つのキャンパスを持つ総合大学であり、学生数は約 25,000 名と、ロンドン大学のカレッジの中で最大規模を誇る。2013 年 QS 世界ランキングでは 19 位、THE 世界ランキングで 38 位にランク付けされ、過去に 12 名のノーベル賞受賞者を輩出している。

イギリスの大学の研究力を測る指標として Research Assessment Exercise (RAE - 2014 年以降は REF: Research Excellence Framework として公表される) があり、全般的に医歯薬系統に強く、最新の RAE の結果を分野別に見ると、健康生活科学、教育学が英国内 1 位、循環器医学、歯学が 3 位、臨床心理学が 5 位、伝染免疫学、臨床・人間生命科学が 6 位、薬学、経営学が 7 位といった評価を受けている。法学教育においては、イギリス国内でもっとも歴史のある大学の一つであり、Law School は「イギリス国内のトップ 5 に入る Law School として広く認識されている」との評価を得ている (*Guardian University Guide 2011*: Law)。

2. 訪問スケジュール

Schedule for the visit

1030	Arrival and coffee
1045	Welcome and introduction to King’s College London (Michael Hughes, Senior International Officer)
1100	Presentation and Q&A: ‘Development and implementation of international strategy at King’s’ (Tayyeb Shah, Director of International Strategy)
1100	Coffee break
1145	Presentation and Q&A: ‘Latest trends and internationalisation initiatives in Japanese higher education’ (Japanese university delegates)
1245	Lunch
1345	Strand Campus Tour
1445	Coffee break
1500	Presentation and Q&A: Study Abroad & Internships at King’s (Gemma Smith, External Relations & Outreach Manager and Adam Dimitroff, Internships Manager)
1545	Presentation and Q&A: Student Advice & International Student Support at King’s – Paul Cornell (Head of Student Information, Advice & Guidance)
1630	Close

3. 発表趣旨

キングズカレッジにおける国際戦略の開発と実施

Development and implementation of international strategy at King’s’ (Tayyeb Shah, Director of International Strategy)

英国においても国際化の進展に伴い、グローバルな社会で活躍できる人材を育成することが社会から求められている。それに応えるための KCL の国際戦略（2017 年まで）について到達点および今後の課題について紹介があった。

© British Council 2014

2013-2014 年の THE 世界ランキングで 38 位に位置づけられており、その中でも国際的な展開に強みを持っている。25,000 人の学生のうち、30%（8000 人：152 か国）を海外からの留学生が占めている。また、在籍している教員の40%が外国籍の教員である。

国際化の進展にともなう学生のグローバル化および高等教育のグローバル化を推進する取り組みを進めていくにあたり、KCL においては国際戦略を時期的に「取組開始⇒開発⇒拡張⇒最終目標」の4段階に区分している。またそれぞれの時期に対して、①戦略の優先順位、②マネジメントモデル、③学生の国際化、④研究および教学、⑤海外における存在感の 5 点について課題を設定し、時期と各テーマおよび課題をマトリックス化することにより大学全体で国際戦略の取り組みについて共有しながら進めている。したがって、現状および今後の取り組む指針が明確化されている。

高等教育市場のグローバル化の進展とともに、大学間の国際的な連携が急速に拡大している。従来の二大学間の学術交流協定に基づく連携だけではなく、今までよりも踏み込んだ形で複数の大学から構成されるコンソーシアム型の連携を結び、教育および研究を共に進めていくパートナーとして以下の 7 大学とより強固な提携をおこなうこととしている。カリフォルニア大学（アメリカ）、ノースカロライナ大学チャペルヒル校（アメリカ）、サンパウロ大学（ブラジル）、中国人民大学（中国）、香港大学（中国）、シンガポール国立大学（シンガポール）、ジャワハルラール・ネルー大学 （インド）。

提携を結ぶ大学については必ずしもランキングの高い大学との提携ではなく、学生数やストラクチャー、コンセプトが似ている大学との提携を目指すべきであると考えている。

学生の国際的な流動性の高まりを受けて、2017 年までに、学部生の 50%に少なくとも 1 か月の海外留学経験をさせることを目標としている。また、20%には1セメスターの海外留学経験をさせる目標を立てている。もともと、KCL の学部生の 20%程度が他国からの留学生であるが、これらの留学生も対象である。

キングズカレッジにおける海外留学およびインターンシップについて

Study Abroad & Internships at King’s (Gemma Smith, External Relations & Outreach Manager and Adam Dimitroff, Internships Manager)

2009 年に海外留学オフィスが設立され、設立当初は 4 名のスタッフが配置されてスタートした。4 年間で留学プログラムも拡大、インターンシッププログラムの開始等、事業を拡大してきており、現在ではチームのスタッフが 12 名、インターン 1 名、6 名のピアアドバイザーで業務を行う体制となっている。

海外留学については 800 名の学生を受け入れ、400 名の学生を送り出している。

海外留学へ対する要求も強くなってきており2013 年については 140 名の派遣先の開拓を目標に行っている。2013 年度に新たに 6 大学と学生交流協定を結び、2014 年には 10 大学と協定を締結する予定である。

大学としても積極的に海外留学を支援していく方針で、その一つとして「GO GLOBAL」というキャッチコピーを用いた広報展開をしている。学費減額、ギャップイヤーの活用、異文化経験、個人および専門領域の拡大、雇用可能性の拡大等のそれぞれのキーワードごとの説明や、1 週間の留学フェアを行なうことにより、学生を海外留学に目を向けていくように働きかけている。

インターンシップについて海外留学の一要素として位置付けられており、2008 年から 840 人が参加しており、2013 年から 2014 年にかけては 160 人が参加している。学部生および修士課程の学生が主な対象となっている。

Employability が一つのキーワードとなっており、就職力の開発に非常に力を注いでいるため、インターンシップ（Work Abroad）の取り組みを強化している。学生に積極的に海外経験におけるインターンシップの経験を積ませることによって、就業先を英国国内だけでなく、海外にも目を向けさせる機会としても捉えている。

送り出し学生の危機管理について、検討を始めたところである。誰がどこに行っているかを常に把握することに注力している。

キングズカレッジにおける国際学生のサポートについて

Support for international Students at King's College London

英国大学における留学生支援は、英国政府主導による留学生支援政策 (Prime Minister's Initiative for International Education) の影響を受け、過去にも増して学生経験の質の向上の重要性が高まっている。大学における留学生サポートは英国留学生問題協議会（UKCISA）などの外部機関とも連携して行っており、質の向上に努めている。さらに学生経験についての外部機関による評価も行われる。

KCL では、以下の部門や組織が中心となって学生支援を行っている：キャリアサービス部門、教会部門、コンパス（総合サービス窓口）、カウンセリング部門、英語教育センター、各研究科、学生連合

KCL では個別にビザや銀行口座の開設、住居、金銭面の相談に応じている。さらにワークショップやオリエンテーション等のイベントを通して、英国での生活に早く順応できるよう手助けを行っている。2013 年のオリエンテーションには 1,500 名を超える学生が参加した。

国際寮でも様々な施設やイベントを提供しており、さらに旅行クラブなども存在し、学生同士の交流の場となっている。さらに留学生には、国際寮に住む以外に、ホストファミリーのもとでホームステイするという選択肢もある。

留学生のビザについては、プログラム開始の 3 か月前までに取得できるようサポートを行っている。留学生が英国のビザを取得するためには、金銭面の証明をする必要があるが、その面で日本人留学生は比較的リスクの少ない学生であるという認識を持っている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

学術交流のパートナー大学を検討する際、ランクの高い大学ばかりに目が行ってしまい、そういった大学との提携を望みがちであるが、ランキングだけではなく大学の理念や得意分野、規模、学生数、組織構造、立地など色々な面からみて、よく似た大学をパートナーとすることも大変重要だと感じた。ランキング常連の著名な大学は一握りである一方、世界には多様な大学が無数にあるので、これらを丁寧に研究すべきであり、似た大学とパートナーシップを組むことは、戦略や問題点の共有などの面で意義が大きいと思う。

KCL では Student Ambassador 制度というものを採用しており、Student Ambassador に採用された学生は大学から時給制で給料を受け取り、大学の事務をサポートしている。また学生からしてみても Student Ambassador に採用されることは名誉なことであり、就職活動でも役立つという。英国では他の大学でも Student Ambassador 制度を採用しており、KCL に限らずポピュラーな制度のようである。さらに英国の大学では Student Union などの学生組合が非常に成熟しており、学生同士でサポートしたり、相談し合ったりするピアサポート体制が整っている。今後、日本でも留学生の受け入れを増やすにあたって、職員によるサポートだけでなく、学生を活用したサポート体制の強化をすることでさらなる学生生活の質の向上につなげることができると感じた。

5. 報告者所感

KCL だけではなく他の大学でも Employability が 1 つのキーワードとなっており、就職力の開発に非常に力を注いでいるのが印象的だった。日本同様英国や欧州の就職事情は大変厳しく、また KCL の資料によれば英国でも 65 パーセント以上の雇用者が雇用判断の際に海外経験を重視しているとのことで、英国においても、大学の留学奨励策の目的の大きな部分を「就職力を向上させること」が占めているようである。また、ダブル・ディグリーの意義についてどう思うか質問すると、視野の広がりなどとともに、就職時のアピール向上を挙げていた。ヨーロッパでの就職事情の厳しさから、ダブル・ディグリーは欧州では特に就職力の向上という意味で一定の評価を得ているようである。

KCL 含め英国の大学は、財政難の解決策として外国から留学生を獲得することには長らく熱心であったが、送り出しについては必ずしもそうではなく、力を入れ始めたのは比較的最近のようである。受入れ学生に対するサポートが非常に高品質で整っており、学ぶべきことが多いのに比べて、送り出しについては学生自身が海外の大学で学ぶということに対して消極的な部分もあるため、どのように学生をエンカレッジするか、送り出した学生をどうケアするかといったことについて、日本と同様な段階にあり、同じような問題を抱えているように感じた。たとえば KCL では、派遣学生を

網羅したデータベースがなく、派遣先での事故等に備えて、どこに誰を送っているのかの把握が急務であり、方法を模索しているとのことである。

KCL に限らず、英国の大学では「学生に何を提供できるか」ということが彼らの戦略の根幹となっていると感じることが多かった。たとえば Study Abroad と必ずセットで Work Abroad というキーワードが出てくることが非常に印象的であった。これは海外での留学、特に職務経験が学生の就職率を上げ、学生満足度の向上につながるからであろう。

（報告担当：国安　真理子、平野　良、藤原　有美子）

© British Council 2014

第 5 回英国大学視察訪問　参加者リスト

	参加者リスト（所属機関名アルファベット順、敬称略）		
1	小林　和世	国際教養大学	学生課　課長
2	能登　博樹	中央大学	国際センター事務室　担当課長
3	国安　真理子	一橋大学	国際企業戦略研究科 総務係
4	片野　靖子	北海道大学	国際本部国際連携課　係長
5	鈴木　民香	慶應義塾大学	日吉学生部（学事担当）　主任
6	文字　真弓	神戸大学	広報室 一般職員
7	清水　祐介	神戸大学	財務部 主任
8	川向　誠	京都工芸繊維大学	研究推進課　係長
9	古賀　朝也	九州大学	国際交流推進室　主任
10	柴田　徹	明治大学	国際教育事務室　職員
11	日笠　誠	沖縄科学技術大学院大学	アカデミックサービス・セクション　学術交流コーディネーター
12	平野　良	立命館アジア太平洋大学	アカデミック・オフィス　課長補佐
13	藤原　有美子	東京工業大学	国際部留学生交流課　事務職員

（所属機関・役職は 2013 年 11 月時点のものです。）

© British Council 2014